

福祉文化通信

～well-beingへの道～

2014.8.10
vol. 74

●発行所/広報委員会
稲田泰紀 関矢秀幸 馬場 清
●制作:山河
●印刷:協友印刷

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

別府でお会いしましょう！

第25回日本福祉文化学会全国大会

大分大会

●大会テーマ

「認知症」を受けとめる

～福祉と文化の見地から～

2014年10月4日(土)、5日(日)

別府国際コンベンションセンター

BICORNプラザ (大分県別府市)



第25回全国大会大分大会
実行委員長 雨宮 洋子

少子・高齢化が進む中、今年度は日本の人口の25%、4人に1人が高齢者の占める割合になりました。

高齢者の増加とともに認知症の人も年々増えて来ています。認知症800万人の時代とも言われ、NHKが各都道府県の警察本部に確認したところ、行方不明者が1万人という事実もあります。

第25回日本福祉文化学会全国大会では「認知

症」を受けとめるというテーマで皆さんと考えていきたいと思えます。認知症の人たちが自分の生活を楽しめ、家庭や地域や職場などで多くの人と交流を図り、生活に張り合いや生きがいを持ち生活を豊かなものにしていくための思いから「認知症」を中心に福祉と文化の見地から実践者と研究者の報告、討論を交えていきたいと思っております。

分科会・研究発表の内容もさることながら、NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」で有名になった黒田官兵衛のルーツをめぐるフィールドワーク、



湯煙立ち上る別府市内

特別講演では南こうせつさんの実兄、勝光寺住職の南 慧昭氏の特別講演など、魅力たっぷりのプログラムとなっております。

別府での全国大会は2回目となります。日本の湧出量を誇る別府温泉と海の幸・山の幸の豊富なこの地においていただき、懇親会も飲み放題で



特別講演講師の南 慧昭氏

大分特産のとり天、団子汁等のおもてなしを用意いたしております。皆様のご参加を心待ちにいたしております。

●大会プログラム(予定)

第1日目 10月4日(土)

午前 オブショナルツアー

「黒田官兵衛のルーツを巡る」

13:00

開会セレモニー

13:20

特別講演「心の健康と仏心は歌心」

15:00

勝光寺 住職 南 慧昭

15:00

基調講演 福祉と文化が出会う時

18:15

「文化」の眼鏡で福祉を観る

18:50

交流分科会

18:00

懇親会 ホテルサンバリアアネックス

9:00

第2日目 10月5日(日)

9:00 日本福祉文化学会総会

10:00 研究発表・委員会企画

13:30 鼎談「我がままに今を生きる
～福祉を文化のメガネで見直す～」

15:00 閉会セレモニー

第10回福祉文化実践学会賞授与式

第6期評議員 選挙報告

次期評議員を決める選挙!!
投票率32・9%

3年に一度の評議員選挙は今年4月半ばに会員の皆さんに投票依頼をし、約1か月の期間を経て5月15日締め切りで終了した。5月17日(土)の午後3時より選挙管

順位	氏名	得票数
19	川北 典子	7
20	大澤 澄男	7
21	五十嵐 真一	7
22	福山 正和	7
23	本多 洋実	6
24	中嶌 洋	6
25	太田 貞司	6
26	坂本 道子	6
27	日比野 正己	6
28	久保 美紀	5
29	結城 俊哉	5
30	空閑 浩人	5
31	志賀 俊紀	5
32	和泉 とみ代	5
33	岡本 民夫	5

有権者数(2013年度会費納入者)286名、投票者数94名、有効投票数594票
無効票11票 投票率32.9%となった。(ホームページに掲載済み)

順位	氏名	得票数
1	馬場 清	45
2	岡村 ヒロ子	28
3	多田 千尋	24
4	石井パークマン麻子	22
5	藺田 碩哉	20
6	藤原 一秀	13
7	佐々木 隆夫	13
8	脇坂 博史	12
9	月田 みづえ	11
10	渡邊 豊	11
11	梅津 迪子	10
12	河島 修	10
13	永山 誠	10
14	小坂 享子	9
15	厚美 薫	8
16	松原 徹	8
17	斎藤 孝夫	8
18	稲田 泰紀	8

理委員長三岳貴彦氏と選挙管理委員の松原徳和氏、そして立会人の大江緑氏の立会いのもと、開票を行った。三割を超える会員から投票をいただいたことに感謝します。投票結果は次の通り。

5月31日に開催された理事会後、評議員承諾の依頼(すでに辞退者あり)を行い、辞退された方の枠については次点(4票獲得者へ)追加依頼などを実施。
今後、9月15日の新評議員予定

北陸ブロック 現場セミナー

新潟水俣病を考えるへの
お誘い

島田 治子

昨年9月に開かれた東京大会のパネルディスカッションは「暮らしとしての福祉文化を問い直す」というテーマだった。2時間で話せることには限りがあるため、今回、現地より深く学ぼうと、パネラーの一人、旗野秀人さん(新潟水俣病患者の会事務局)の地元である阿賀野川流域を訪ねる現場セミナーを企画した。日程は9月27日(土)・28日(日)の2日間である。

1日目の昼に開始。「阿賀に生きる」の映画を上映する。阿賀の人々が、いかに地元の自然と密接にかかわりながら暮らしていたか。それこそが人間本来の暮らしであるはずなのに、



阿賀に生きる映画ポスター

川とともに暮らした結果、水俣病を発症してしまったという皮肉。その現実を、映画と旗野さんのお話から考えてみたい。

2日目は新潟水俣病と水環境をテーマにした施設「環境と人間のふれあい館」で勉強した後、千唐仁地区の患者たちと昼食をともしながら、直に体験談を聞くこととした。1965年に確認された新潟水俣病は、患者の高齢化もあり、この機会を逃すと、生の声を聞くのはかなり難しくなると思われる。

ドイツ連邦のヴァイツェッカー第6代大統領が行った演説の中に「過去に眼を閉ざす者は、未来に對してもやはり盲目となる」という言葉がある。新潟水俣病は、現在も苦しんでいる患者たちがいるという意味でも、過去の公害ではないが、水俣病を軸に、「地域と暮らし」、そして「福祉文化」を現実に学ぶことで、未来の社会を考えてみたい。(詳細は別紙チラシにて)

震災支援委員会 「気仙沼セミナー」

6月28日(29日宮城県仙台市と気仙沼市で東北落語会を行った)今年1月に開催した志摩市立神での落語会で大好評だった桂福丸さんに、今度は東北被災地での落語会をお願いした。灘高、京大卒で落語家になった福丸さんは、阪神淡路大震災の時は高校生で、学校の校庭で1ヶ月寝泊まりしたそうだ。

1日目は仙台市の七郷中央公園仮設住宅集会場。集まったのは仮設住宅の方々約30名。単身で仮設住宅に入っているお年寄りが多いと感じた。「断はいくつか用意して、会場の雰囲気切り替える」と言っておられた通り、最初から大笑いが続いた。

80歳くらいの方が、ひたすら何かを書いている。後でうかがうと、



福丸さんの公演に聞き入っています

世界一周報告

「World We Want Day
(未来をのぞく日)」

岡村ヒロ子

クルーズも残すところ一週間となった日、「World We Want Day」が企画された。3つのテーマから、30年後の社会を考えることがねらいである。

一つ目のテーマは「今クルーズで学んだ世界の現状と自分のおかれた状況と立場」。

一番印象が強かった寄港地は？と問われたら、私はためらいなく「タヒチ」と答える。

南太平洋の広大な海域には118の島々からなる仏領ポリネシアが広がっている。タヒチ本島はその行政・経済の中心である。タヒチの反核・先住民権活動家ガブリエルさんから、フランスが南太平洋海域で1000回を越える核実験を重ねてきた事実を聞き、愕然とした。莫大な援助金でタヒチの伝統産業・農業・漁業はすたれ、被ばくした島民には痛が多発し、奇形児の出生率も高い。一瞬、福島の姿がよぎった。ジャーナリストの高瀬毅さんは地球全体が放射能に汚染された今、私達は何世代にもわたる「核時代を生き

ていかなければいけない」と語った。核とどう向き合っていくかを我々は問われている。次世代にこれらの事実を伝えていくことが私達世代に課せられた役目と痛感した。

二つ目のテーマは「30年後の社会に求めること」。私は民族・文化・思想・宗教・資源を超えた国境のない、地球村を目指したい。一人ひとりが「分」をわきまえれば争いはなくなり、皆が安心して暮らせる社会になると思う。地球の間借り人である私達が争いごとを繰り返して血を流しあい、自



伝統的作物ココナツの収穫



農園でタロイモの収穫

然環境を汚してはマナー違反である。

最後のテーマは「それに向けて自分が取ろうとするアクションと10年後の自分の姿」。

現在、取り組んでいる原発・環境問題、災害支援に関する活動を地道に続けることだと考えている。10年後も元気に船旅をし、社会への怒りをぶつけている自分でありたい。

ガブリエルさんのNGO「ヒティ・タウ」は「今、立ち上がる時」という意味だ。福島への想いを熱く語り「あなた方が立ちあがらないでどうする」と結んだ言葉が忘れられない。

企画委員会よび

学会大会において①「研究と実践の融合」と②「地域文化と福祉」を開催いたします。この企画は、日本福祉文化学会が実践に基づいた研究と地域文化への着眼点を深めるために学会大会ごとに開催し



昨年大会の様子

（学会員から福祉文化のルーツを考える視点で、3回コースで執筆いただきます。今年度は園田顧問より寄稿いただきます。）

文化の眼鏡で福祉を見る

園田碩哉（日本福祉文化学会顧問）

学問と言うのは常識に異をとなえるものだという事は、「太陽ではなく地球が回っているのだ」と主張して迫害されたガリレオの昔から変わりません。その伝

言えば、福祉文化研究とは「福祉文化」を極めることだというこの学会の常識も疑ってみる価値があります。これまで「福祉文化」なるものを何やら高邁な、深淵なものと思いついて「福祉文化とは何か」という問いが飽くことなく続けられてきたのですが、この問題の立て方そのものを見直す必要があります。

福祉と文化を結合させて「福祉文化」という固まりにしてしまおうと、何かそこに確固たる実

体があるみたいな気がしてきます。その上、これまでの多くの学会員は「文化」のイメージを

価値志向的に、つまり文化人と文化国家とかいう用例に見る

ような「人間生活を高めるもの」と考えてきたようです。そこで

「福祉文化」は人間の幸福を産み出す理想的な状態のように捉えられ、素晴らしい福祉文化の追求やその具体化策を考えること

が学会の研究課題とされてきたように思われます。

確かに「文化」にはそういう価値的な意味もありますが、それは古典的な（あつさり言えば古い）捉え方で、現在「文化」という語の一般的な使い方は、より客観的、没価値的に、ある人間集団の生活様式とか考え方の特徴を

包括的に捉える用語になっているのです。日本文化とは欧米とは異なる日本人の生活スタイルのことで、欧米と比べて格別優れている

と言いたいのではなく、欧米といろんな面で違いがある所に注目して使う用語です。日本の中でも各地域にはそれぞれ固有の「地域文化」があり、企業に行けばそれぞれの会社ごとに社風が違い、固有の企業文化が見出されます。学校

には学校文化があり、病院には医療文化があるように、社会福祉領域にも特徴的な福祉文化が存在しているということです。

そもそも福祉文化研究とは、「福祉文化」の研究ではなくて、福祉の「文化研究」だというのが私の持論です。「の」の位置をちよつと変えただけでコトは大き

く変わります。「福祉文化」という新概念を持ち出して、そこに何か崇高な理念があるように思いなしてあれこれ議論をしているうちに、かえってことを分かりにくくしてしまつたさらいがあります。

私たちの出発点は社会福祉の現実、決して豊かとは言えず、さまざまな混乱や矛盾をはらんだ福祉現場の現状を少しでも良くするという願ひであつたはずで

そのために「文化」という視点をもち込んで、文化の眼鏡を通して福祉の現状を見据え、その問題点を指摘し、解決の方策を検討すること―福祉を対象とした文化研究こそ、この学会の立脚点でなくてはなりません。

「文化」というのは単純なものではなく、歴史の展開の中でさまざまな意味を獲得してきた多義的な用語です。文化の眼鏡は近視用から遠視用までいろいろな種類があります。それを生かして福祉の実像に迫ることこそ、これからの福祉文化研究の方向です。

（つぎは平成26年12月発行・通信75号に掲載の予定です）

2014年度 第1回理事会終了

5月31日（土）午後1時30分から今年度第1回目の理事会が開催された。この理事会では、前年度学会決算の承認と第6期評議員選挙の結果報告、第25回全国大会大分大会内容と今年度の現場セミナーなどの開催内容を検討した。（選挙結果はホームページに掲載。また、今年度の各種セミナーは会員発送に同封。）ぜひご参加いただきたい。

「報告」関東ブロック実践・研究交流会

「福祉現場で求められる職員の質とは何か？」と題して8月2日に立教大学にて開催されました。結城俊哉氏（立教大学教授）を

コーディネーターに、話題提供者として、横内康行氏（綾瀬あかしあ園施設長）、加藤喜大氏（日本総合福祉会）、多久島重信氏（障害者施設利用者家族）が施設長・現場職員・利用者家族の方々が実例を通して語り、さまざまな立場の参加者の皆様と意見交換をしました。

●新会員紹介

2014年7月15日までに、ご入会された方のお名前と所属プロジェクトをお知らせ致します。

- 有馬正史、梅森愛美、小野寺千鶴、鈴木尚正、成田イクコ、松永愛子、吉松丈裕（関東）
- 山下一郎、成田隆人（中部東海）
- 川瀬弓子、脇屋和美（北陸）
- 今井慶宗、北尾亜由子（関西）
- 豊福和明（九州）（敬称略）

「福祉文化研究」24号 原稿募集中!!

福祉文化についての学術研究や実践活動から生まれた方法論、実践活動等を紹介する研究誌です。研究者と現場実践者双方から、社会のさまざまな局面における福祉文化についての研究論文を募集しています。原稿締め切りは8月31日（日）（消印有効）厳守。

「福祉文化実践報告集」9号 原稿募集中!!

日本福祉文化学会では、会員の実践活動を投稿いただき、年に1回『福祉文化実践報告集』としてまとめています。あなたの実践活動をお寄せください。原稿締め切りは12月31日（水）（消印有効）厳守。

※詳細は先般送付のチラシおよび「福祉文化実践報告集第8号」をご参照ください。